

令和4年度 中部地区子ども支援 net 議事録

日 時：令和4年10月14日（金） 13:30 ～ 16:00

場 所：奄美市市民交流センター 大多目的室

参加者：愛かな、ここ園、シエル名瀬教室（2）、スターズ、にこぴあ、のぞみ園、チャレンジサポート奄美（2）、相支援のぞみ園、奄美中央病院、金久保育所、名瀬保健所（3）、奄美市健康増進課（3）、奄美市福祉政策課（2）、瀬戸内町保健福祉課（2）、ぴあリンク奄美（2） 計29名（講師事務局含む）



1. 開会あいさつ

奄美市福祉政策課 喜納 祐司 課長



2. 自己紹介

3. 資料説明及び事業報告

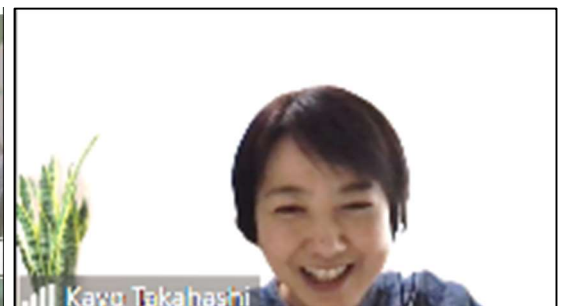
○奄美地区地域自立支援協議会
（子ども部会・子ども支援 net）とは？
※詳細に関しては別紙資料参照



4. ミニ研修

「発達支援における保護者との連携について」

鹿児島大大学院臨床心理研究科 准教授 高橋 佳代 氏



5. グループワーク

「奄美中部での障がい児やその家族を支える人たちの連携について」

1 グループ(スターズ、シエル名瀬教室、奄美中央病院、奄美市健康増進課)

- ・事業所、保育所など関わっているところがしっかりと情報を共有、交換する。
- ・利用者にも、広く情報知っていただき、利用者同士をつなげることができたらよい。
- ・子ども食堂など交流の場の活用による連携。
- ・検診から受け入れまでに時間がかかってしまうため、早期（未就学児）の段階から、地域の関係多業種で情報共有していくことが大切。
- ・学校での本人の様子など、情報共有ができると、より支援に生かしやすいのではないかな。
- ・養護学校とは連携が取れている。地域の学校では、学級担任との連携が難しいと感じる場面が多い。学校の先生方と、今回のような会を利用して、交流できるとよい（交流の場が必要）
- ・どの業種がどこまでやればよいかな、どこにつなげばよいかなということを明確にし、支援につなげていくためにも、関係機関のつながりは大切。
- ・保護者がいろいろな機関にそれぞれちがう内容で相談していたという事例が出された。後で情報共有したところ、相談内容に対応できる適切な相談機関に伝わっていなかったこともあったので、保護者も含め関係機関が情報共有しておくことで、しかるべきところに相談することができるのではないかなという意見があった。
- ・医療との連携の際に、相談支援専門員と連携を取りながら行うことが必要。



2 グループ（チャレンジサポート奄美、のぞみ園、にこぴあ、名瀬保健所、奄美市健康増進課）

- ・就学前と、就学後での連携の在り方の違いを感じている。（療育、保育とは良くなってきているが、まだ教育との連携の難しさを感じている。）
- ・学校と直接連携をとることや、支援のお願いが簡単ではない現状がある。（医的ケア児への対応など）
- ・難しい状況なども含め、課題を挙げていく、ひとつずつ話し合い、問題解決を図っていく必要があるのではないかな。
- ・複数事業所利用、保育所等との併用の場合の事業所間の連携について、連絡帳を共有することで、それぞれの事業所での様子や、家庭の様子など共有しやすくなるという事例があった。（学校との連携でも生かせるのではないかな）
- ・相談支援を中心に、支援者が支援の方向性を統一するための場を作ることが、「顔の見える連携」につながるのではないかな。
- ・医療との連携について。事業所によっても、連携のあり方はそれぞれ（医療（病院、訪看）機関との関係性による）
- ・小児慢性疾患の場合は、保健所が間に入って医療とつなぐことも可能という情報提供があった。
- ・今回のような会を通して顔の見える連携、関係性を作ること、新しい連携の形を作っていくことが



重要。

- ・初対面での保護者とやり取りの場合、解決を急がず、関係性を作りながら、必要なタイミングを捉えアプローチを捉えて関わっていくことが重要ではないか。
- ・今日の研修で、保護者が求めていることを理解するために、しっかり話を聞くことの重要性を改めて感じる事ができた。

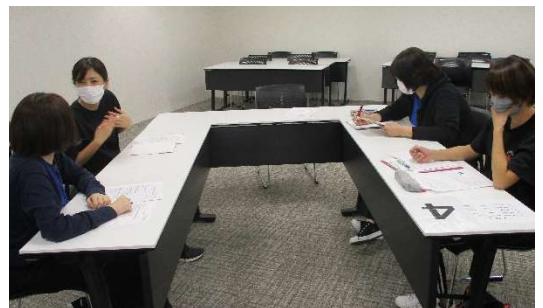
3 グループ（にこぴあ、相支のぞみ園、金久保育所、奄美市福祉政策課）

- ・最近「言葉」に関する相談が多くなっている。（病院でも）
- ・病院の訓練では、言葉の訓練だけでなく、体の使い方も教えている。体の使い方を学んでいくという事の重要性があるので、療育に繋げる際も、訓練の方法などを伝えるようにしている。（ただ繋げるだけでなく、支援方法なども共有できたら良い）
- ・今回の会に参加して「顔の見える関係の重要性」を感じた。
日頃の支援に悩んでいる中、このような場があることで、様々な職種からアドバイスを受けることができ、どのように療育につなげていけばよいのかという事もわかった。
- ・奄美地区の障害児支援システムの周知も大切だと感じた。（連携にも生かせるのでは）
- ・生活リズム、睡眠障害の課題を抱えている子どもさんの場合は、保護者への支援も大切。
- ・保育所等訪問では、学校の敷居が高いように感じる。小中学校の先生方とこのような場を活かして交流を深めたい。



4 グループ（チャレンジサポート奄美、ここ、金久保育所、瀬戸内町保健福祉課）

- ・就学についての相談を保護者で行う際、療育事業所と連携をとり、職員の方が間に入っていただくことで、考え方など見えにくかったところも知ることができ、良い機会となった。
- ・福祉サービスの流れ、療育などについて、知らない保育士、保護者も多い。今回のような連携の場へ参加することで、色々と知る機会となり、連携が取りやすくなるのではないか。（つながりができることで、療育へのつながりもスムーズにできていくのではないかな。）
- ・保育所から、療育事業所への見学がまだ少ないと感じている。今後、そのような場を作っていくことも大切。（関わり方も学んでいく機会になる）
- ・奄美市でも療育事業所の空きがない場合、せっかく気持ちが療育に向きかけた保護者の気持ちが変わってしまう事もある。親子教室などの活用や、現在の利用児へ、利用日数の調整などの協力をお願いし、必要な方に少しずつでも、支援が届くように工夫出来たらよい。
- ・保護者が最初に相談するのは、保育士が多い。療育事業所それぞれの強みやカラーなどを保育士側が把握しておくことで、保護者により具体的な情報提供ができるようになるのではないかな。



5 グループ（愛かな、名瀬保健所、瀬戸内町保健福祉課、龍郷町子ども子育て応援課）

- ・学校との連携（情報共有）が難しいと感じる。学校に行政から情報を聞こうとしても、「保護者から聞いてください」と言われるなど、保護者任せにされていると感じる場面があり、学校からの様子が見えてこないという困り感が上がった。
- ・好事例として、龍郷支援 net の紹介があった。年に3回、保健師、保育士を中心に意見交換している。その場には、学校からも参加があり、支援学級担任や指導主事も参加していただくことで、学校の様子が見えやすくなったと感じている。
- ・困ってから、利用開始された事例。困り果てて利用に繋がった。理由として、病院受診時に医師へ症状を伝える際、本人がうまく伝えきれなかったが、保健師や相談支援専門員が同行することで、情報の乖離を減らしていくことができた。

